

# 馬 追 鳥

【大成話型番号五二〈動物昔話・小鳥前生〉】 伝承資料

## 【青森県】

三戸郡五戸町〔\*手つきり姉さま/通観2「馬追(まお)鳥」典型話、原題「馬追鳥の前生」〕

昔、侍の家で、立派な馬をあずかって(飼養して)いた。ある日、係の下男が一寸眠った間に、馬がどこかに逃げて行ってしまった。下男は大変心配して岳の方へ探しに行き、二十一日間も露ばかり舐めて探して廻った。けれどもどうしても馬の行方が分らなかった。仕方がないので、戻って来ると、不都合な奴だといって旦那に叱られて、手打ちになった。

下男の魂はそれが口惜しくて、遂にマオ鳥になり、今でもマオマオといって馬を探している。それでその念で、この鳥が鳴くときとよくないことが起るといふ。またお天気の悪い日には、手打ちにした主人がうらめしく、マオマオと鳴くのだそうである。

三戸郡南郷町〔\*奥南新報33/通観2・類話/大成・類話〕

ある年の端午に岳へ馬を放つ。戻ると一頭足りない。飼主は夢中で探している間に鳥になる。馬追(まお)鳥という。この鳥には馬の尻かけの型がついており、今もまおまおと啼くといふ。

---

## 【岩手県】

二戸市〔\*陸奥二戸の昔話/通観3・類話18/大成・類話〕

典型話( )にほぼ同じ。若者は馬を野に放しに行つて見失ひ、「まおえ、まおえ」と探すうちにまおえ鳥になる。まおえ鳥を見た者は長生きしない。

久慈市〔\*九戸郡誌/大成「馬追鳥」典型話〕

昔、あるところに意地の悪い継母と十歳ばかりの男の子があつた。ある日、その子が馬に草を食べさせに野原へ行つたが、ちょっとしたはずみに馬を逃がしてしまつた。子供は心配してあちこち探したが、どうも見当たらなかつた。それで泣きながら羈(おもづら)だけもつて、夕方おそく家に帰つた。すると意地の悪い継母は、頭からがみがみ怒つて、羈で子供をたたいて、馬を見つけてこいといつて家を追い出した。子供は夜通し、馬(んま)ーおー馬ーおうと呼んで歩いたが、ついに馬は見つからなかつた。夜の明け方、子供は疲れて野原に寝てしまつた。そうしてそのまま魂がかたまって鳥になつた。その鳥がまーおーと鳴くまお鳥だといふ。まお鳥の背には羈で打たれたあとがあるといふ。

岩手郡滝沢村〔\*農村生活変遷中心の滝沢村誌/通観3「馬追い鳥」典型話、原題「馬鳥」〕

昔は子供が十二、三になると、山に馬を見つけにいかにされていた。ある家のかわいらしい十二歳の子供が継母に「馬を見つけてこい。見つけられなければ家に入れなかつた」と命じられて山へやられる。子供は深

い山に入って馬を捜しまわるが、よその馬ばかりで自分の家の馬は見つからない。子供は馬のたづなを振って、「うまぁ、おう」と呼びまわるうちに日が暮れる。子供は道に迷って泣き歩くうち、馬の口もっこをかけたような鳥になった。この鳥は今も「馬おお、馬おお」と鳴いている。この鳥が村にたくさんやってくると、世の中に悪いことがおこる。

# 1 (同郡零石町)〔通観3・類話2~4 /大成・類話〕典型話( )にほとんど同じ。兄弟の継子が野に馬を放って見失う。家に帰って継母に叱られ、再び探しに行く。「あーほうまあーほ」と探し疲れて眠り、まーお鳥になる。この鳥にはおも綱のあとがあり、今も夕方まーおと鳴くという。この鳥が出ると雨か嵐になるそうだ。

# 2 (同郡玉山村)〔通観3・類話5〕継子のモチーフなし。「あおー」と呼ぶ。

下閉伊郡岩泉町〔\*火っこをたんもうれ・岩泉の昔ばなし /通観3・類話12〕

典型話( )にほぼ同じ。馬守(まぶ)り童子(わらし)。「ママァオウ」と鳴く。

紫波郡都南村〔\*方言と土俗1-6 /通観3・類話11 /大成・類話〕

典型話( )にほぼ同じ。継子が馬を山に放ち、昼寝している間に逃げられる。「あほ、あほ」と叫んでいる間に鳥になり、今もこのように鳴いている。

和賀郡沢内村〔\*ゆりいかが聞いた岩手の昔ばなし /通観3・類話20〕

典型話( )にほぼ同じ。奉公人。「マオー、マオー、ガシャガシャ」と、くつわの音をさせて鳴く。

# 1 (同郡和賀町)〔通観3・類話21〕典型話( )にほぼ同じ。子守り娘が留守居をしていて種つけ馬に逃げられる。「マオー、マオー」と呼びまわるうちに身も心もすり切れてなくなり、声だけの鳥になる。

上閉伊郡宮守村〔佐々木健の語りによる遠野郷宮守村の昔ばなし /原題「アオーってゆう鳥」〕

アオつつうのは、黒い馬のごどなんだおなす。これは、むかしの話だけでも、ある豪農が牧童っこ使っていたんだどす。そして山さ、アオ、放牧する季節が来たんで、山さ連れでいって放したんだどす。放した山つつうのは寺沢ってゆう山で、そごさ連れでって放したんだなす。うんで、こんど、連れでもどしてくる時(とき)に、その牧童っこ、逃がしてしまったんだどす、そのアオをす。山の中をうんと探したけども、どうしても見あたらねからって、帰(け)ってきたんだどす。

したら、豪農の旦那どのに、「そんなごどでだめだ。探さいげ、探してこい」と言(ゆ)われでなす、ほんで、こんど、一人で寺沢さ行って — 高さが五百メートルも六百メートルもある山だからなす —、そごさ行って、「アオやー、アオやー」って叫(さが)んで歩いだんだどす。けども、いっこう出はって来(こ)ねがったんだどす。その牧童っこ、「アオー、アオー。早く出はって来(こ)やー。アオー、アオー」って叫(さが)んでいどうちに、鳥っこになったんだどす。アオー鳥ってゆう鳥っこになったんだ。どんどはれ。

〈いまでも、夏の明け方とか暮れ方に、アオーってゆう鳥っこが鳴くって言(ゆ)うのす。わだしは、聞いたごども見だごどもねえども、その時期だけに鳴く鳥っこだったうんだなす。この話はほんとうの話のような気(きい)するなす。〉

## 遠野市〔遠野物語52〕

馬追鳥（ウマオヒドリ）は時鳥に似て少し大きく、羽の色は赤に茶を帯び、肩には馬の綱のやうなる縞あり。胸のあたりにクツゴコのやうなるかたあり。これも或長者が家の奉公人、山へ馬を放しに行き、家に帰らんとするに一匹不足せり。夜通し之を求めあるきしが終に此鳥となる。アーホー、アーホーと啼くは此地方にて野に居る馬を追ふ声なり。年により馬追鳥里に来て啼くことあるは飢饉の前兆なり。深山には常に住みて啼く声を聞けり。

### # 1（同市）〔『聞耳草紙』一一四番「鳥の譚」の「馬追ひ鳥（其の九）」〕

或所に一人の馬放童うまはながあつた。毎日々々多くの馬を連れて山へ野飼に行つた。或日夕方となつたから、これから馬を呼集めて家へ帰るべと思ふと、馬がなんぼしても一疋不足した。あゝほオ、あほゝオと彼方此方に向いて呼んで見ても来ないし、沢へ下りて尋ね、谷さ廻つて探し、峯長嶺を越えて探してもなぞにしても其馬が見付からなかつた。

童は家へ還ることが出来ない。帰つたら旦那様に叱責ちげられるのであつた。そこでなぞにしても見付けべと思つて、山の奥へ奥へと入つて行つて、「あゝほう、あゝほう」と一生懸命に呼んで歩いた。そして遂々魂たまにが尽きて鳥になつた。

それは今の馬追ひ鳥だと謂ふ。今でも春五月頃になつて山々の若葉が伸びて来ると、深山の中で其鳥が恰度郷の童らが馬を呼ぶやうな声で啼いて居る。〔引用は『佐々木喜善全集』、五二八頁〕

〔注〕他に、喜善の発表した資料として、同様の伝承が、「鳥に關しての伝説童話」（『日本勸業銀行月報』第七十二号所収、大正八年六月十五日）『上閉伊郡昔話集』三六「鳥の話」（昭和十八年刊）などに載せられている。なお、『遠野物語』五二話の末尾に記された、「年により馬追鳥里に来て啼くことあるは飢饉の前兆なり。深山には常に住みて啼く声を聞くなり」が、喜善の報告資料にはまったく記されていない。しかも、『遠野物語』では直前の五一話として載せる「夫鳥」の伝承の末尾に、喜善は、「古老の説に依りますと、此の鳥が里辺近くの山へ来て鳴く時は、其の年は凶作だと申してをります。平常は余程深山に住むである鳥らしく思はれます。馬追ひ鳥などもよほど深山の鳥でございます」（日本勸業銀行月報「鳥に關しての伝説童話」〈三、夫鳥〉）「齡寄達の話に拠ると、此鳥が里辺近くの山へ来て啼くと、其年は凶作だと謂ふて居る。平素（ふだん）は余程の深山に住む鳥らしい」（『聞耳草紙』の「夫鳥（其の六）」）と記している。柳田の側に何らかの混乱があつたものか。ただし、馬追鳥と異変は関連する。

### # 2（同市土淵町山口）〔遠野の昔話〕同前、「アアホウ、アアホウ」

# 3（同市土淵町和野）〔通観3・類話17〕典型話（ ）にほぼ同じ。子のない夫婦にもらわれた男の子。父親に叱られるのがこわくて捜し歩く。

## 気仙郡住田町〔住田町史・第六巻〕

昔むかし、ある所にトド（父）とカガ（母）と、男の子の三人が仲よく暮らしていた。ところが、カガがポックリと亡くなったので、トドは後釜に後妻をもらった。この後妻は、意地の悪い女ごで、先妻の男の子はなんだかんだっていじめるんだ。ある日のこと、後妻が男の子さ、ポロポロの着物を着せて、「山さ行って、鳥ば追（ほ）ってこー」と、長い竹ザオをわたした。男の子は竹ザオを肩にして、一日いっぺあ、歩きまわって夕方に戻ってきたれば、後妻が待っていて、「どんな鳥ば、ポツたか、かたってみる」って、聞くんだ。男の子が、首をかしげて、「なじよな鳥だか、おぼえていねあ。俺あわかんねあ……」って語つた。そしてたら、「それあ、鳥ばさっぱ、ボわねあで、遊び回ってたがら、わかんね

あんだ！」と、そんな者あ、家さ入れることあできねあって、入り口の戸を閉めてしまったど。

男の子は泣きながら、仕方なく、また山さ登って行っただ。そして夜中じゅう、竹ザオを振り回しながら、「マオー、マオー！」と、叫んで歩いていたんだど。その夜、トド（父）が、「童（わらし）あ、なじよになった？」と聞いたれば、後妻は、「今朝から山さ鳥ボイに行っって、そのまま帰ってこない。何して遊んでるもんだが」と、さも憎々しそうに言うんだど。次の朝、しんべあになったトドが、山さ登ってあちこち捜したんだど。なかなか見つからねあんで、山の頂うえさあがって、「マオー、マオー、マオーッ」って、大きな声で呼んでみれば、どこからか「マオー、マオー」って返事があったんだど。急いでそちらの方さ行っってみれば、大きな木に一羽の鳥こがとまっていて、マオー、マオーと、声をかからして鳴いていだんだど。

それは、後妻におこられて追い出された男の子が、一晚じゅう、呼んでいるうちに、鳥になってしまった姿だったんだねあ。それで、その鳥こば「マオードリ（馬追鳥）」って、呼ぶようになったんだど。どんどはらえ。

# 1（同郡）〔\* 続住田風土記 / 通観 3・類話 10〕典型話（ ）にほぼ同じ。子供を山に馬追いにやる。

翌朝、父が子供を捜しに山に行くと、木の上で鳥が「おおう、まおう」と鳴いている。

# 2（同郡）〔通観 3・類話 9〕典型話（ ）にほぼ同じ。野原に寝ると魂が凍って鳥になる。背には継母に折檻されたあとがある。

胆沢郡衣川村〔扇屋おつる — 岩手・衣川の昔ばなし / 原題「馬追鳥」〕

元（もど）この辺でもっしゃ、山さ馬放したもんだ。そんでほれ、どごの家でも、馬っこ放してね。そして後（あだ）、暮方になるつつど、その馬連れで来さ（連れ帰るために）山へ行ったもんだもね。したっけほれ、ある家にね、下男のいだどごろあったんだどっしゃ。そして、旦那（だな）殿の飼ってる馬は、高価な馬だったので、そんでほれ、その馬を朝間放してっしゃ、そして、暮方になってね、「馬連れで来さ行ったらいがべ」って、旦那殿に言われで、そんでその押（おし）えさ（捕まえに）行ったのなんだってしゃ。して、タデゴ（轡）を背負って、そして山さ行っただどね。そうしたれば、ほれいっつもここれ（この辺）にいだったなあど思って、そっちこっち眺めだり呼んだりしてね。そして後（あど）馬いねがら、いっつもの山でねんだなど思って、次の山がら次の山こう、「馬（ま）お馬（ま）お馬（ま）お馬（ま）お、ほうほうほう」って、叫（さが）んだもんだもなさ。そすつとほれ、いっつものは、馬は連れさ来る人だど思って、いななぐが叫（さが）んだもんだも。ハハハハーンて、叫んだもんだず。はあこごにいだなあど思って、背負（しょ）ってだタデゴを降してね、そして馬はそごさ来てね、タデゴかげで、そして後（あだ）家（え）さ連れできたもんだど。とごろがその日にかぎって、さっぱりいねしね、あ、どっちゃ行っただが訳（わけ）わがねし、とにかく旦那殿ほれ、本当（ほんと）に好ぎで飼ってだ馬だし、高価な馬だったので、旦那殿大切にしてくだのだから、帰（け）ってって連れで行がねば旦那殿に叱られるつのでね、段々暗くなってきたの、馬見つからねがら、まずそっちさ行っって叫（さげ）びこっちさ行っって叫んでらんだね。そしてるうぢに見づからねし、そして後その若（わけ）者真剣なつて叫んでではあ、段々にはあそのまま、マオーマオーつのでね、叫びながらはあ、鳥っこになって、飛んでつたつて。

ほんで、マオー鳥づものあ、それがら出だもんなんだどや。そう聞いだったね。

一関市〔\* 岩手県郷土教育資料 / 通観 3・類話 1〕

典型話（ ）にほぼ同じ。木の股にはさまって、「マオー、マオー」と叫んでいるうちに鳥になる。

## 【秋田県】

仙北郡角館町〔\* 県人雑誌13 - 4 / 通観5「継子とかっこう」類話〕

継子が継母の言いつけで山の沢へ馬を放し、夕方馬を集めるが一匹足りない。そのまま帰ると、継母にきつく叱られ、日の暮れた山へ捜しにやられる。子は泣く泣く沢へ入り、「マオマオ」と馬を呼ぶうちにマオ鳥（オサ鳩）となった。

## 【宮城県】

栗原郡栗駒町〔\* 陸前の昔話 / 通観4「まお鳥と嫁」典型話、原題「馬追鳥」〕

山に馬を放し飼いにしている家の嫁が、夕方馬を捜したが見つからない。舅に、どうしても捜してこいと言われ、暗くなって山の中を尋ねまわっているうちに芋堀り穴へ落ちて死に、鳥になる。夕暮れに「マオー、マオー」と鳴くので馬追鳥と呼ばれる。

# 1（同町）〔通観4・類話1〕継母が継子に「馬を捜してこい」と言いつけ、継子は捜したが見つからない。毎日責められた継子は鳥になり、今も馬を捜している。

---

### < 参考話 >

(a) 【青森県】上北郡東北町〔青森の昔話 / 原題「馬を探すほととぎす」〕

むかし、親も兄弟もない、可哀そうな子供があった。村の長者の家にやとわれて馬飼いの仕事をしていて。春のある日いつものように、子供は馬を山へ連れて行って放し飼いにして、草を食わせていた。いつの間にか居ねむりしているうちに、夕方になって目をさました。子供はびっくりして馬を連れて帰ろうとすると、どこへ行ったものか馬の姿は見えない。あっちこっち探して歩いたがどうしても見当らない。そのうちに日が暮れてしまったので、仕方なく家に帰って長者に詫をした。けれども長者は腹を立てて、許してくれない。どうしても今一度探してこいという。子供は仕方なくまたあっちこっちと探して歩いたがどうしても見当らない。

子供は泣く泣く、鳥にでもなって空からでも探して見たいと思った。すると不思議にも、子供はもう小さな鳥になっていた。子供は今度は空をとんで馬を探してあるいた。「アッチャトンデッタカ、コッチャトンデッタカ」と、一生懸命に啼き叫ぶホトトギスはこの鳥である。

(b) 【山形県】最上郡最上町笹森〔羽前小国昔話集 / 通観6「馬追い鳥」孤立伝承話、原題「駒鳥」〕

昔、馬番役の子供がいた。山へ放牧していた馬を一頭見失い、旦那から「捜さないうちはもどるな」と叱られ、日が暮れてから山へもどり捜し疲れて死ぬ。その子は鳥に生まれ変わり、「ヒーン、来い来い。ヒーン、来い来い」と草の茂る頃に山を叫び歩くそうだ。その鳥の口にはクツワのあとが付いている。

(c) 【宮城県】白石市本町〔\* 陸前の昔話 / 通観4・類話2〕

後家が連れ子をして山中の一軒屋に来る。父が連れ子に町でぽっくりを買ってくれる。まりつきをしているうちに、まりが川に落ち、ぽっくりの片方もいっしょに流れる。継子はこのまま家に帰っては怒られ

ると、「カッコー」と叫んでいるうちに、郭公鳥になった。

(d)【静岡県】庵原郡富士川町〔\*静岡県伝説昔話集/通観13「水乞い鳥——馬飼い型」類話19〕

昔、ある人が馬に水をやらずに無理に使った報いで馬追い鳥になる。この鳥は、腹の赤い色が水に映って水が飲めず、天を仰いで雨を飲む。だから馬追い鳥が鳴くと雨が降る。

(e)【愛知県】渥美郡〔\*愛知県伝説集/通観13「ほいほい鳥」類話1〕

田原町の貧しい一家の母子がたきぎを取りに行き、他人の木をとって帰ったので村人に責められ、池にはまって死ぬ。間もなく「ほういほうい」と呼ぶ二羽の鳥が現われ、「ほいほい鳥」とその名を呼ばれるようになった。(ほいほい鳥はコノハヅクのことという)

(f)【島根県】仁多郡横田町馬木〔奥出雲昔話集/通観27補遺「馬追鳥」変形、原題「おわあ鳥」〕

昔、継母が継子に「子守をせえ、子守をせえ」と言い、継子は毎日子を負うのが大義で怠けていた。ある時、継母に追われて山へ逃げ、鳥になって飛び立って遊んでばかりいたら、御飯を食べるすべもなく、あまりに辛くて、「おわあ(負いましょう)、おわあ」と鳴いているようだ。

(g)【長崎県】壱岐郡〔\*壱岐島昔話集/大成「馬追鳥」類話〕

継子が牛の子を連れて草飼いに行く。継子は牛をとばし、継母にしかられて探しに行つて崖から落ちて死ぬ。それから「ほーふほーい」と牛の子を呼ぶという。鳥になったとはいわない。

【参考資料】

『遠野物語』柳田国男(一九一〇年 聚精堂、引用は複製版)

「鳥についての伝説童話」佐々木喜善(一九一九年 『日本勸業銀行月報』一七二号、引用は全集)

『聞耳草紙』佐々木喜善(一九三一年 三元社、引用は全集)

『岩手県上閉伊郡昔話集』佐々木喜善(一九四三年 三省堂、引用は一九七三年再版)

『青森県の昔話』川合勇太郎(一九七二年、津軽書房)

『羽前小国昔話集』佐藤義則(一九七四年、岩崎美術社)

『遠野の昔話』遠野民話同好会編(一九七五年、NHK出版協会)

『奥出雲昔話集』田中瑩一(一九八〇年、岩崎美術社)

『扇屋おつる — 岩手・衣川の昔ばなし — 』常光徹・花部英雄(一九八七年、みちのく民芸企画)

『佐々木健の語りによる 遠野郷宮守村の昔ばなし』小野和子・庄司幸栄

(一九九二年、世界民話博実行委員会)

『住田町史』第六巻民俗編(一九九四年、住田町史編纂委員会)

\*なお、以下の資料は、『日本昔話通観』および『日本昔話大成』を参照した。

『手つきり姉さま』〔通観2〕 『奥南新報』33〔通観2〕 『県人雑誌』13-4〔通観5〕 『農村生活変遷中心の滝沢村誌』〔通観3〕 『岩手県郷土教育資料』〔通観3〕 『続住田風土記』〔通観3〕 『方言と土俗』1-6〔通観3〕 『火っこをたんもうれ・岩泉の昔ばなし』〔通観3〕 『陸奥二戸の昔話』〔通観3〕 『ゆりいかが聞いた岩手の昔ばなし』〔通観3〕 『九戸郡誌』〔大成1〕 『陸前の昔話』〔通観4〕 『静岡伝説昔話集』〔通観13〕 『愛知県伝説集』〔通観13〕 『壱岐島昔話集』〔大成1〕